



城

第三十二回 シヨン城 (Château de Chillon)

～レマン湖畔の美しき城～

深草 祐一

今回は、いつもと趣向を変えて外国の城を取り上げてみます。世界知的所有権機関 (WIPO) 事務局のあるジュネーブに行かれた方は訪れたことがあるかも知れません。スイスのレマン湖畔に浮かぶ“建築の宝石”、シヨン城です。この城に注目しつつ、スイスのレマン湖周辺地域の歴史について、その一部をご紹介しますと思います。

戦略的位置

シヨン城の建つレマン湖の東岸は、紀元前からの街道が通る戦略上の要衝です。北イタリアからグラン・サン・ベルナル峠を越え、レマン湖東岸を通過してヌシャテル湖方面へと抜ける街道は、古代より様々な物資が往来し、あのカエサルも通ったという、アルプス越えのメインルートの一つでした。レマン湖の東岸は湖の際から急勾配で山がそびえており、湖岸の非常に狭い街道を通る他ありません。湖の岸近くに浮かぶ岩島に城が築かれたのは必然と言えるかも知れません。シヨン城は、この街道の通行税を徴収する関門の城だったのです。

サヴォワ時代の大改修

12世紀初期になると、それまでシオン (Sion) 司教の所有であったシヨン (Chillon) 城は、サヴォワ伯爵家に与えられ、以後16世紀までサヴォワ伯爵 (後に公爵) の城として整備されることとなります。サヴォワ家は、一時はフランス南部のリヨン周辺から東の東部、北はヌシャテルから南はトリノまでを領有するに至るほどの権勢を誇り、後に紆余曲折を経てサルディーニャ王国、そしてイタリア王国へとつながっていく家です。シヨン城は、サヴォワ時代に大規模な普請が行われてほぼ現在の規模と形になったということで、サヴォワ家の夏の離宮として使用され、最も華やかな時代を迎えます。

城の湖側には居住区となる瓦屋根の木造建築が連なっ



建物内部の装飾

ていますが、幾何学的な模様が施された壁、木枠の組み合わせでデザインされた天井など、意匠が凝らされた室内は、近世絶対王政時代の大宮殿ほど派手ではないものの、中世の貴族の栄華を偲ばせる立派なものです。

一方、山側は二重の城壁と見張り塔がそびえ立ち、城壁の内側には兵士が行き来する回廊が設けられています。そして、城壁とそこから少し張り出した円筒形の塔の壁には上下に細長い形状の銃眼が穿たれており、湖岸へ押し寄せ敵、または湖 (濠とも言える) を押し渡ろうとする敵の側面へ向かって、下向きに20～30mの最適な距離から射撃を行うことができるようになっています。ただ、こうした形状の銃眼や胸壁の屋根等は、16世紀にベルンがこの地を含むヴォー州一帯を奪った後に改修されたものだということです。

宗教改革とベルンの支配

シヨン城の歴史といった場合、必ず語られるのが、16世紀の宗教改革による争乱の時代、カトリック派の領主サヴォワ家によって、ジュネーブのサン・ヴィクトル小修道

院長フランシス・ボニヴァールがここの地下牢に幽閉されていたというエピソードです。19世紀になって、イギリスの詩人バイロンがこの地を訪れ、「シヨンの囚人」という詩作を著したことで、特に有名になったようです。ボニヴァールは、新教派のベルンがサヴォワからこの地を奪った時に開放されるのですが、以下、その前後の歴史を見ていくことにしましょう。

スイス中西部の都市ベルンは、スイスの盟約者団の一員であり、近隣の都市や司教領主らと提携を結び、次第に西へと支配地を拡大していました。盟約者団とは、ウィリアム・テルの伝説に語られる、ハプスブルグ家をはじめとする地方領主たちの支配に対抗するため原初三州の盟約から始まった相互協力体制で、現在のスイス連邦の基礎となったものです。過去、ハプスブルグ家は、この無礼な農民どもに鉄槌を下そうと大規模な騎士団を派遣したことがありましたが、盟約者団は歩兵によるゲリラ戦法で由緒ある騎士達を無残に殺戮し、ヨーロッパ中に衝撃を与えました。そして、盟約者団が八州、十三州と拡大していく過程で盟約に加わった都市ベルンは、15世紀の半ばに中央ヨーロッパで勢力拡大を図ったブルゴーニュ公国のシャルル突進公に戦いを挑み、これを三度破って戦死に追いやって「スイス兵強し」の印象をさらに強めたといえます。その際、ベルンはブルゴーニュ家と同盟関係にあったサヴォワ家にも宣戦を布告し、シヨン城を含むヴォー州を奪い取ります。しかし、戦争後の会議で、支援者だったフランス国王や他の盟約者仲間の反対に遭い、サヴォワ家へ返還させられました。

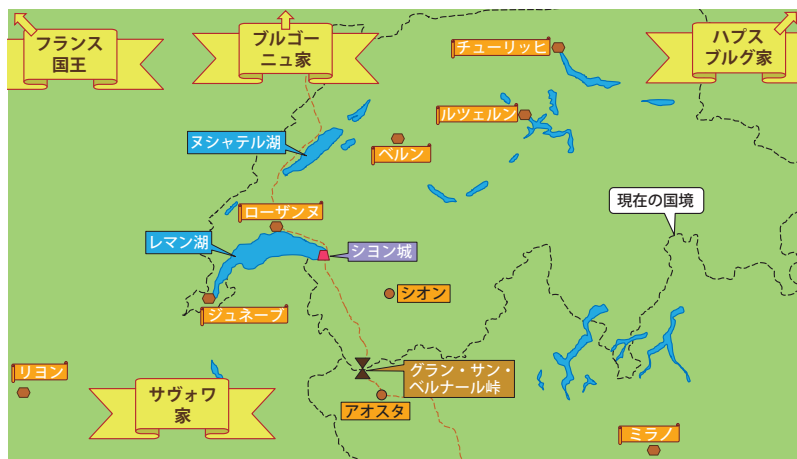
16世紀に入ると、ドイツのマルティン・ルターがローマ教会を痛烈に批判し、いわゆる宗教改革が起こります。すると、各地においてローマ教会に嫌悪を抱いていた新教派諸侯と神聖ローマ皇帝等のカトリック派が対立するようになり、争乱が続きました。そして、レマン湖の西の端ジュネーブでは、サヴォワと司教の支配から脱したい者たちが新教派のベルンの支援を仰いでカトリック派と対立。サヴォワは、新教派のサン・ヴィクトル小修道院長フランシス・ボニヴァールをシヨン城の地下牢に幽閉し、さらにジュ

ネーブを軍隊で包囲しました。そこでベルンは軍を派遣。ヴォー州を通過してジュネーブの門前まで進撃し、サヴォワ軍を撤退に追い込みました。この時、サヴォワはジュネーブの放棄・自由都市化を約束しましたが、なおジュネーブを攻め続けたことから、「宗教改革を救う」という口実でジュネーブからの救援要請を受けたベルンはサヴォワに宣戦を布告。ヴォー州の全サヴォワ領を占領した上で、ジュネーブに達します。そして、シヨン城の地下牢の柱に鎖で繋がれていたボニヴァールは4年ぶりに解放されたのでした。ジュネーブのおかげでヴォー州を得たベルンは、その後シヨン城に代官を入れ、ヴォー州を臣従地として支配していくこととなります。

ちなみに、それから60年余りの後、諦めきれないサヴォワは、軍を派遣して城壁に囲まれたジュネーブを攻め落とそうとしました。この時、夜陰に紛れて城壁に梯子をかけ攻め込む作戦（梯子作戦＝エスカラード）がとられましたが、ある婦人がいち早くこれに気付き、手近にあった煮えたぎるスープを浴びせかけて撃退。それをきっかけにしてジュネーブ市民が奮闘し、ついにサヴォワ軍は撤退させられました。この時が、ジュネーブがサヴォワから完全に独立して自由都市となった時とされており、これを記念したエスカラード祭りが毎年12月に行われています。

その後のシヨン城

その後、18世紀にヴォー州革命が起こり、ヴォー州はベルンから独立。スイス連邦の一員となって現在を迎えます。そして、ヴォー州の所有となったシヨン城は、幸いにも正確に残されていた図面を元に修復され、レマン湖西岸の観光都市モントルーにほど近い観光スポットの一つとして、その美しさを讃えられ続けています。湖に向かって右手には世界遺産登録されているラ・ヴォー地区のぶどう畑、そして左手にはモンブランへ連なるアルプスの山々を望むことができます。ジュネーブへ行ったならば、是非足を伸ばしてみたい場所です。



シヨン城の位置と周辺勢力



シヨン城の胸壁と銃眼